

通信部日記

東北の通信部で過ごした7年余



ジャーナリスト

塚本 弘毅

今年4月末で、東北で過ごした約7年5カ月の単身赴任の通信部生活を最後に毎日新聞社を退職した。思えば、1970年入社の子葉支局（千葉市）を振り出しに長い毎日新聞人生だった。東京本社勤務から通信部に出たのは、定年の60歳近くになり定年後も働ける場の一つとして通信部があることを知って手を上げたからだ。

通信部を希望するにあたり、「全国どこでも行きます」と会社に宣言した手前もあって、福島県原町市（現南相馬市）の原町通信部（現南相馬通信部）を二つ返事でOKした。許諾後に、「ところで原町とはどこにあるんですか」と人事担当者に尋ねたが、それが2003年12月1日付からの我が通信部生活のスタートだった。09年4月には、約20年前に青森支局（青森市）勤務をした経験から青森県を志願して弘前通信部へ異動した。さまざまな出会いがあり、今振り返るとあっという間に過ぎた通信部生活だったが、東北人の内面に秘められた温もりが忘れられない。

原町（現南相馬市）通信部時代

原町通信部は1985年5月から空席となり、18年ぶりの復活だった。担当区域は、宮城県境の相馬市から南下し、原町市や双葉、浪江の両町など計9市町村。06年1月には、鹿島、小高両町と原町市が合併して南相馬市が誕生した。通信部も「原町」から「南相馬」に改称された。今や南相馬市など担当区域は、東日本大震災の被災地で、何よりも東京電力福島第一原発事故の大きな被害を受けてすっかり全国的に知られるようになった。しかし、私が赴任した時は、毎年7月に相馬市や南相

馬市などで行われる「相馬野馬追」が最大イベントという南東北の穏やかな田園地帯だった。

東側の太平洋沿いにJR常磐線とほぼ並行して国道6号が走る。双葉町と隣町の大熊町には福島第一原発の1～6号機が稼働していた。大熊町の福島第一原発事務所や7、8号機増設凍結解除した時など双葉町には何度も取材した。その当時は「発電に伴う放射性廃棄物を処理できないトイレなき原発」という意識があった。しかし、地震と津波で原発が壊滅し、周辺住民が住めなくなるなどという危機意識は正直なところなかった。

07年の参院選での選挙企画（福島版）では、「現場発地域課題を追う」と題するシリーズで「原発行政」を福島支局と共同で1回取り上げた。「安全か経済効果か」という見出しだったが、このような事態に陥るとは私の認識は甘かった。原発事故を想定した訓練が行われたことがあった。その関連記事を読み直してみれば、訓練に参加した東電や行政の関係者は最悪の事態は想定外の悠長な想定の下で実施し、私もおさなりに原稿を書いていたんだなあと恥ずかしい気持ちだ。

震災・原発の被災地に

「3.11」後は、当時の知っている光景は一変した。心の準備がまだ出来ていないため、まだ現地には足を踏み入れていないが、これまでの報道や知人などの情報では余りにもの変わりように胸を突かれる思いだ。担当した区域の常磐線と国道6号沿いの海岸までの地域はほぼ津波に襲われたようだ。相馬市の太平洋岸の潟湖で景観を誇る松川浦や浪江町請

戸の海辺にあった造り酒屋なども津波被害を受けた。何と言っても深刻なのは、現在も進行中で収束のめどが立っていない福島第一原発事故による放射能被災が福島県だけでなく関東など周辺地域にまで影響を及ぼしていることだ。

改めて原町と南相馬通信部時代の私の書いた記事を張ってあるスクラップ帳を開いてみると、あの人やこの人たちはどうしているだろうかという思いに駆られる。新聞などで現況に触れている記事で知っている人たちが登場していると、「ああ元気だったか」と安どしたり「頑張ってくれよ」と祈ったりしている。

その中の一つとして、強く記憶に残るのは足しげく訪れた飯館村だ。飯館村は04年に隣接する原町市などとの合併話から離脱し、自立を選択した。阿武隈山系の高原地帯にある小さい村ながら、アイデアマンの菅野典雄村長のリードよろしく「までい（丁寧、心を込めて）」な独自の村づくりに励んできた。「小さいことはいいことだ」として村民とともに減農薬などの循環型農業を目指していたのに、それが放射能汚染の影響で計画的避難区域に指定された。ほとんどの住民が避難せざるを得なくなり、そのような村民の願いは頓挫してしまった。

村で唯一のカフェ「極久里（あくり）」は山荘ふうのしゃれた建物で、経営する市沢秀耕さん夫妻の磨き抜かれたコーヒーの味に引かれて県外客も訪れるほどだった。自作の無農薬野菜などを提供する自然食レストランを05年に開設した村上真平さん夫妻……みんな村を離れてしまった。「どぶろく特区」を認められた村で、5年前からどぶろくを作り販売していた「きまぐれ茶屋ちえこ」はどうなっ

たろうか。

また、警戒区域や計画的避難区域などに指定された南相馬市。現在1期目の桜井勝延市長は今年4月、米誌タイムの「世界で最も影響力のある100人」の1人に選ばれた。桜井市長は英語字幕付きの動画で「政府や東京電力からの情報が不足している」と世界に向けて発信したことが、日本の政治家として珍しく明確に発言したことがたたえられて選出された。通信部時代に桜井市長とは市議を務めていた時から交流があり、よく市政問題などを一緒に論じた仲だった。4月ごろ携帯電話で連絡があり、通信部当時と変わらぬ元気な口調でひとまず安心した覚えがある。

旧友との連絡

さらに、宮城県に避難している元南相馬市役所職員や横浜市に避難の元双葉町議らと電話連絡が取れた。もっと落ち込んでいたと思っていたが、予想以上の日常と余り変わらぬ明るい声にホッとした。しかし、スクラップ帳を広げては当時の「平和な光景」を思い出して現在の窮状との落差に愕然とする。

そして、南相馬市で過ごしていたころ毎晩のごとく食事をした定食屋、行きつけの居酒屋、喫茶店などを思い出す。取材で知り合った住民の方や市議、市役所職員など数多くの人たちの顔を思い浮かべては、「3.11」後の「新たな歴史」に対して私はどう向き合えばいいのか悩んでいる。旧交を温めるように何気なく現地を訪問すれば済むのか。ボランティア活動するべきか。取材ならば大義名分ができて行きやすいが、取材を離れた今は、大いに迷うところだ。しかし、あるがままの

弘前通信部時代

姿で訪れて会うしかないと思えるようになってきた。埼玉県の親類宅に避難している元南相馬市役所職員と懇談した際、「会いに行けばみんな喜ぶよ」と言われた。その言葉を支えとして、再び南相馬通信部時の担当区域を回ってみようと考えている。

それにしても、今までの対応を見て東京電力の無責任につながる当事者意識の希薄さにはあきれられるばかりだ。「想定外の地震と津波に襲われた自分たちこそ被害者」と想定しているのではとってしまう。今回の原発事故で地震国の日本に54基の原発を許してきた政府・電力会社の異常さを改めて痛感した。原発の技術はいまだ未完成であり、人類の英知では制御できないことも分かった。事故がなかったにしろ、原発操業に伴って増加する一方の放射性廃棄物の問題がある。安全になるまで低レベルでも300年間、高レベルなら少なくとも10万年の管理が必要だという。300年前なら江戸時代中期、10万年前では旧石器時代にあたるが、まさしく気の遠くなるような時間で、これを安全に管理できるとは到底思えない。

しかも、自国処理では無理と「核のごみ」を日米主導でモンゴルに作る計画も持ち上がっているに至っては、今後の選択肢は「脱原発」しかないと思う。そもそも、単に水を熱した蒸気でタービンを回して電気を起こすのに、なぜ原爆と同じ原理の原発なのかという疑問がある。そもそも原発の出自は、原子力潜水艦などの軍事からの転用だという見方もある。これからも人類が存在するとして、目先の既得権益維持のために負の遺産を10万年後まで押しつけていいのだろうか。

一方、弘前通信部へは08年4月1日付で着任した。一つ所で4年以上もいると、大体はマンネリに陥ってくる。このため、青森県の独特の良さを思い出して希望したら、弘前という話が結びついて決まった。私は秋田県出身だが、隣県なのにこうも違うのかなと感じていた。20年前の青森支局と今回の通信部で計6年余り青森県に在住した経験では、まず雪の降り方が厳しい。津軽の地面から猛烈に雪が吹き上げてくる地吹雪がよくあり、積雪量も多くて、半年は「雪の季節」と言っている。そういう中から生まれたのが、魂を揺さぶる津軽三味線だと思う。その真骨頂は、ただ「たたく」のではなく初代の高橋竹山のように激しさの中にも津軽の大地から静かに語りかけてくるような弾き方だと思う。

こうした長い冬が終わりを告げる春の「さくら祭り」は心躍る。特に日本一のさくらと誇る弘前公園はリンゴの剪定技術を取り入れてさくらの樹木を整備し、枝に咲く花びらの数が多いなど見事な咲きっぷり。こうした花見の季節になると、「お互いに厳冬期をよく耐えてきたなあ」としみじみと思えてくる。行き交う人たちにも肩をたたきあいたくなるような気持ちになる。それ故か、総じてほかにはないような人情味あふれるタイプが津軽人と言える。居酒屋でも隣りあわせになれば、口は悪いけど初対面でも親切に話しかけてくる。取材を通じて会った方々も、表面的な「お上手」は言えない誠意を感じる。とかく分かりにくいと言われる津軽弁、それがまた飾らぬ人柄を表す。だから、津軽人と知り合うと長い付き合いになる。この傾向は東北

一般に言えるかもしれないが、青森・津軽は特別な気がしてならない。

南相馬通信部と違って、四季折々のイベントが多いのが弘前通信部の特徴ではないだろうか。主なものを拾ってみても、さくら祭りのほか、5月は弘前の「りんご花まつり」、夏には各地のねぶた・ねぶた祭り、秋は紅葉だ。冬季の2月は弘前公園で「弘前城雪燈籠（どうろう）まつり」が開かれる。さらに、雪囲いや雪囲い解除、1月に弘前の鬼神社での「裸参り」などが行われる。弘前市は日本一のリンゴ産地であり、リンゴ関係の取材も欠かせない。台風が接近すると、リンゴ落下被害が起こらないかを警戒しなければならない。県内で唯一の国立大学法人の弘前大学(弘前市)を控えており、不祥事も含めて何かと話題になる。弘前市内には病院・診療所が多いため医療ミスや、それを訴える損害賠償訴訟なども多い。この間に、衆院と参院の選挙や首長選が入る。弘前市など津軽は、葛西善蔵、太宰治、石坂洋次郎、今官一らの作家を輩出した土地柄で、現在もその土壤は引き継がれており文化活動が盛んだ。

青森にも原発立地

また、弘前市に隣接する大鰐町は、08年度決算で県内で初めて財政健全化団体に転落した。大鰐温泉スキー場を運営する第3セクターなどの町の損失補償が財政を圧迫したためだ。この問題を扱う町議会などに何度も取材に出かけた。弘前通信部管内は大鰐町だけでなく、黒石市、鯹ヶ沢町、深浦町など軒並み財政悪化に苦しんでおり、目が離せない状態が続いていた。10年12月に東北新幹線新青

森駅が開業し、今年は「弘前城築城400年祭」を迎え、それに向けた観光客誘致のイベントが目白押しだった。加えて事件事故があり、それなりになんやかんやとあった通信部ではあった。

弘前の夜の部が、またよかった。コーヒー店（これは昼の部でも）、洋食屋やレストラン、老舗のそば屋、城下町らしい風情ある居酒屋など。そこに集う酔客が、顔なじみになると「やあ、よぐきたなあ」と打ち解けたりして楽しい一夜を過ごすことができた。料理も日本海や陸奥湾産などの魚介類、地元の山菜や特別育成の長谷川自然牧場の豚肉など地元産食材の味が忘れられない。八甲田山系と十和田湖や西海岸の日本海、津軽と下北の両半島など豊かな自然もある。こうした津軽で出会った人や産物など、「胸に染み入る光景」が懐かしく、退職後も2カ月ごとに足を運んでいる。

しかし、下北半島の最北端に位置する大間町に原発建設計画があり、東通村には東北電力の原発が操業しており、東京電力も計画している。さらに、六ヶ所村の核燃料再処理工場が本格稼働すれば1年間で原発が排出する放射能を1日で出すと言われている。自然豊かな青森にも過疎地狙い撃ちの「原子力の影」が覆っている。今後、どういう展開を示していくのか、起こるかもしれないその危険性を危惧している。